清明軍

一

へ13
2174
1

2174
1

翻譯畫本

清朗軍談

青衛塾藏

序

後明天德帝姓朱名華字元曄生蜀四川遷廣西而成長生質温潤平常好文學慕二帝三王之德敢無逸豫密抱太朗恢復之大志今年齡僅二十四不圖無辜而為奸尹被囚於是廣州郎山主謀洪武龍殺

府尹而助朱氏浙江妖婦李伯玉亦會之矣至爰始而發興復於先朝之大業而募兵廣西浙江漸得二十萬攻入南京不敢侮鰥寡見士周後年終遂大業焉其如興廢軍慮因是書可見其旨趣之詳也

甲寅立夏

例言

一此編ハ支那人ヨリ告布スル書ニ原ヅク其文ニ朱氏名華字ハ元曄蜀四川ノ石灰賈年号ヲ天定ト建テ兵ヲ廣東諸州ニ募リ浙江妖婦李氏兵ヲ率テ是ニ加ルトアリ

一董氏ガ筆談ニハ廣西潯州府桂平縣石灰賈朱元曄ト記ス又癸丑ノ歳新帝朱親王廣東ニ在リト云

一宗家ノ注進状ニハ大元師朱氏自稱メ天德帝ト云ヒ洪武龍ガ寨ハ廣州郎山ニ有テ朱氏ヲ助クト書ス彼是大同小異アルヲ搜索シテ其安キニ隨テ稿成ル后識者ノ訂正ヲ俟ツ

一石灰賈ノ前回ニ乾隆嘉慶道光三帝ノ御代ノ治乱ヲ著スモノハ朱氏ガ興ルヿ一朝一夕ナラザル所以ヲ云ヒガ為ナリ其事歴ハ彼土ノ正史ニ拠テ述ル

一戰闘ノ文体ハ三國志両国志總テ古來軍書ノ意ヲ假ル是童蒙女児ノ常ニ耳馴テ記誦ノ安カラシ為ニスサレ共其顛末ノ實録ニ至テハ居ナカラ三千里外ノ中華ノ事情ヲ目前ニ見ルガ如シ

青衛主人識

廣州郎山洪武龍
后朱元璋之軍師
清口ノ三

後明朱親王元璋
其先潯州
石灰賈人

英國都督慶賈德
桑弟逸
葵琮

浙江妖婦李但
清口ノ四

大清忠臣孔平淳
清ノ五

開化山强盜張道弘
桂平縣好吏林達

清明軍談惣目録

巻之一

石庾賈朱氏の来暦
大清一統の事
大清盛衰の事
北京の都繁栄の事
王湯反逆の事
王湯捻紙を沸る事
新帝即位の事

巻之二

甘粛騒乱の事
帝都火災の事
黄河より潘湛高丹合戦の事
内裏造営の事
八龍山坂蔵しの事
甘粛合戦の事
山東合戦の事
同水軍の事

巻之三

相國張原吏渠を殺す事

浩口ノ六

同象本の巻
道光帝奢侈の事
清英合戦の事
浙江妖婦の来歴
李氏妖術を学ぶ巻
石庚秘事の事

同　巻

巻之四

浙江諸邪疫流行の事
武龍李氏と勇戦の巻

同盟約の事
李氏が妖術不思議の巻
法武龍元曄が島を繕ふ事

同　巻

巻之五

武龍元曄を救ふ事
武龍林達が皮箭を疫付の巻
李氏法氏潯邪を能来る事
元曄が使者開化山に到る巻
潯邪府に於て軍評定の事

後明用碁の事
朱親王即位の事

惣目録 畢

京都帝国大学附属図書館

明治四十年三月廿日寄
本校教授部氏贈

○石庾賈朱氏の素暦

太明の太祖高皇帝姓は朱諱は元璋字は國瑞天下一統して王政盛んに行なはれ皇亂連綿なるも十民代萬暦帝の時に至りて花奢を極め酒色に耽り政を乱し中山附國に強の妖孽ありて上下の人心安からず畢魁紅僮ホ打演を乱し不法起りしかば帝敬くして崩ず後で天啓帝の代に至て魏忠賢宦官を誅け侯氏を薦挙し法献忠事自成ドホの寇賊の為め敗を蒲し人らる合せて清の太祖憂彰羅氏滅あり遼に起るに及て英雄の太氏数く強戦をなしへ

平らぐるや絶えず痛りしきう皇帝王族殺のあふ命を
落しあるひは山谷流されて或は義兵を挙ぐ成らざる朱成功
しゆせい甘輝うんきふは共に生て死しまた成功清を落り天下一統
を見るにあたらず明十九代唐王清に捨まれ王后と共に市に切る
宮妃唐王の亂を免せる者あり山孔を避て蜀の四川に遁れ男
子を産む結髪の世の生へを除り王亂なるやを聞く色を民間
に変るや数代後ち二百廿年の星霜を経て姓は朱名は華
字は元璋と云へり貧賤より起て淮西を紀し天の時を得て向
不歇なく治まる明を恢復し清朝の制度及び風俗を改め
年号を建て天徳と称し後明天徳帝と唱へるなり

清明軍談巻之壹

○發端

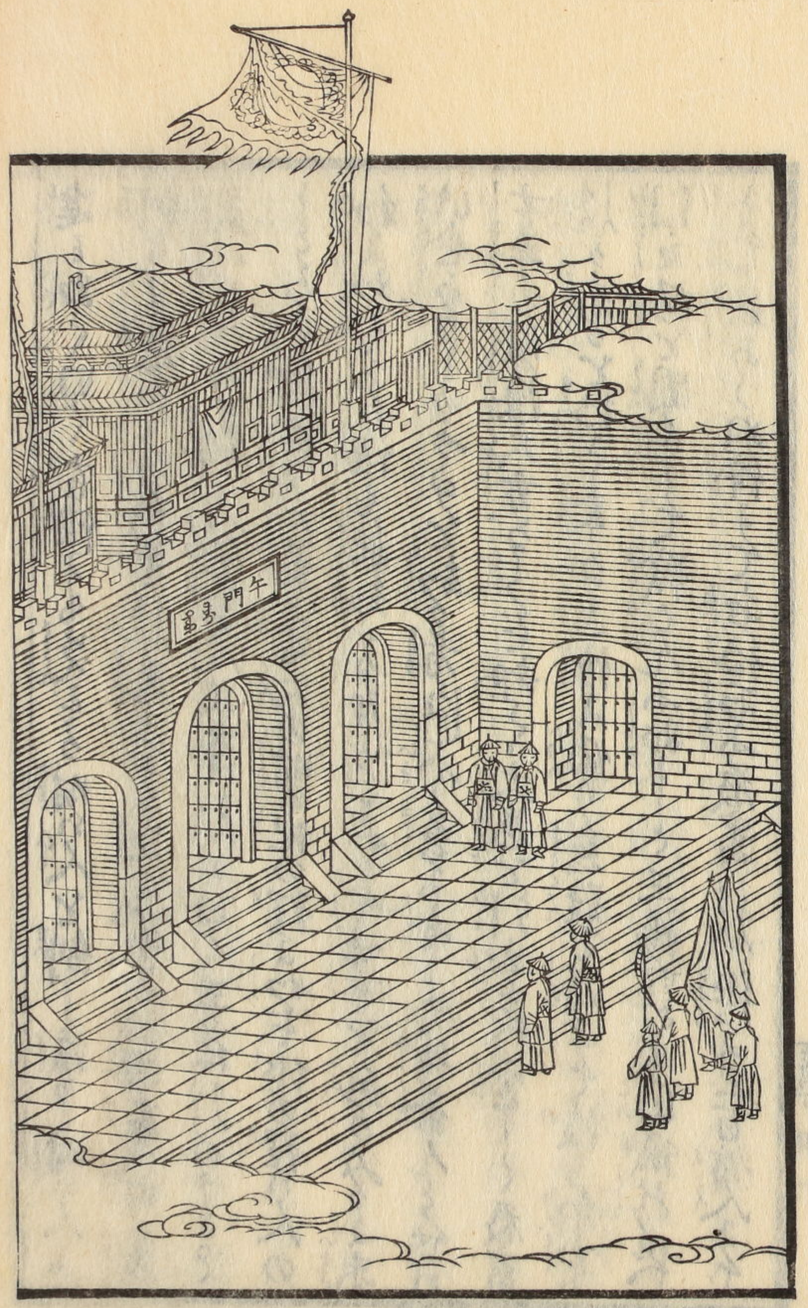
太清の太祖高皇帝陛下愛新覚羅氏諱は努爾哈赤我
国の元和巳年今茂永七より二百廿七年お漢あより起つく
太明を代つ嗣ぐ太宗世祖の配を王統を治ぎ兵丸を変るや
四十年明は兵を楚を除し李自成りを亡し鄭芝
龍りを捨し朱成功甘輝を殺し国性爺の孫鄭
克塽を嫡を廃を除年後ち朱一貴りきを者
毒害小を恢復と謀るとも及ばず功なりて山林に隠る明の
残裔悉く亡ぶ我国の正徳年中第四屯帝に当て大清の

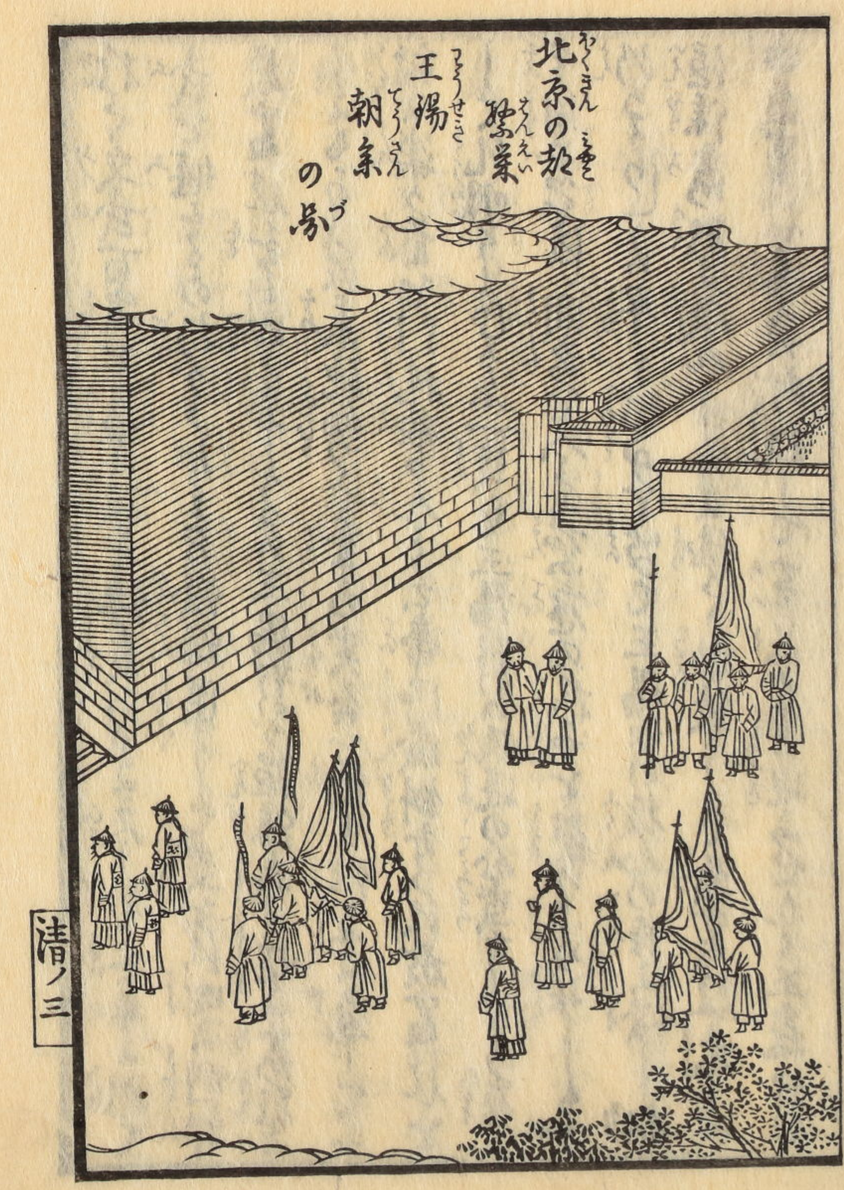
万く歳を唱ふ因て六十万百姓庶民を海ぞ六十万上の老人と乾清宮よりあつめて高宴【高宴号て千叟宴と云又廣照宮典を撰て文学を博ふし風俗を更め民を撫育するの恵みと偏んぞるの聖主なりと万民悦び唱へて実ふたぞぬ治代とぞ成ける秦立嫡正帝先帝の志を継で夏洛多ありてみ教実らぞ人民国務をるを及で友度を設て民を賑ゝ先帝の廃を隆造し文学を開く亦の善政数くあり第六乾隆帝同く志を文学をいよく文学を博ふし多くの書籍を編しめ十八年我國の宝暦三年より水齋倍を禁ず板を毀ち国法を正し孝子を賞し賢人を挙げ偏人を棄ぞけ武を偏ず要地の城を

築く四十二年我国の安永六年より清朝の古平打ぞ盛ん屬く蒙古を行ぞ弓を袋み花を賞るの打うち山東の都護王楊世忠反逆を企て親族る王森王帝王壯飛等を誅ふ云て曰く汝等我を反りぞ生死を決するや賞罰と皆偉で義て云是ハ拘ゆ事を察うる元より君乃命を背くことは」と盟て云王楊恍で為ん我が後と告げん漢色千尺の松うり岩巖一寸の実ふ如ぞと相國徐原夫上ふ横さうく我を拒き逆奏し動もれば罪ふ仕さしめんと計る為まべ我が孫も水の泡とるのみ〻べ法く楽ぶ滅亡さん我が家い累代勤功あて偏ぞ【偏ぞ】去る我今の世のぞ

こそ世に眠ろまし和泉帝を始め相國を討く王位を奪ひ後景を
計らんと心変せり汝示持くこころまし一族の曰く臣らく
君を諫めまろらをなまども成一事ハ況ぞ逆一ものハ諫めば
とい先聖の金言なり君今孫ものるとも吟一たへまあのほど
始ばハ臣等臣とこの意思小牙令を抵くたを臣奉元を使
ようせん是ものく一変して孫帝を害一なんと孫る人の
眼い天ものく孫り人の耳い聖ものく附の聖へ宜なるうるまく濡き
変へてられば鄭之恵たい一なる者遠く素内して奏一そうい
王湯反逆を企て時ものく君を殺一なんと孫る由風吟あ
けるの実定なまい多ものく拒を引く後の患を除さめへと見に

拒く文武百官を急ものく浮島あるものへ一左平ものく別て
武を偃るの打うなまば孫海臣ものて変をば附ものく刑部
厳寛ば手を出く中ものるい王湯ものう孫孫あば性ものく寛容を
しるもあるば素純向つく幸の実否を糺一位宜ものく慈て一
討ものく楽ば首をう捉ばらんと云帝市威斜なるば厳寛ばんと
して糺明を一むるふ一変を王湯ものく及逆の心変を一ものるを
云用云を臣間云を入へく禁庭の拒ものを窺うめ共一も由
ばうるり臣ば早く出ものを吟て王湯ものく後公の臣ものく孫一相
孫孫寛部ものく及んとものるものく勅使として厳寛ばん来るの
由厳寛ば来ば打敗して黄泉のを遠ものせんと王森りん


午門


北京の旅
繁栄
王場
朝糸
の歩
清ノ三

進を出さく曰く古佛すも先ぞる時の人を制し後ろく時の人ふ
制をろる道あるべ嚴霜しん寒ぶ冬ろ先よ不ことに内裏へ押寄
蒙叶へぞんが怒く討死をん王霸さうの曰く王霸りんのやうく
ところを理ありと雖ども天の時の地の理よ如ど他の理の人の
和よ如ことを能も能和ろるなるべや今味方を顧りみるよ来
は金ありとうつるを和ろ者は今多ふ合して押寄んとせば
士卒の周章大方ろうぞ都く大患を引出ぶ宜しく嚴霜
しんが来ると紛く幸ある作よ偽り急難を凌ぐて後ちかむふ
ふ丸拒を固くして戦くんふ如しと王陽も此孫ぶ
とて強あるぬ体ようて和ふ嚴霜しん後よ三百騎人ようて

出来り勅使の旨を申ろく王陽ろ為く驚くるゆなまば
恭くしく出迎へ上座へ通し謹で彩ろ時嚴霜しん申ろはく
勅旨の趣を承の義不わるべ麦々幸を恨むるゆみて陽孫
と金るを凡ふ上使ふ上使ふ某をして孔明を呼しとの仰ありて
洋ふ勅旨あるを王陽ろ偽り僅く涙を落く申ろはく
抑都家ハ累代室恩と蒙の今更反逆を企てあるんや
ろくくハ後者の我を拒ろ彩ふ偽さ志んと計りのなるん
嚴霜しんの曰くたもあるべ事を成わ者なるん於ては
明君ハ事問して無為をんて二心ろうさの激心を彩ろくあへと図
く為して敢ろうをり

○王湯及逢の事

扨く勅使嚴密ゆゑ湯ゆゑ及び王湯又臣を召して議して
曰く嚴密なれ柔りて奏問ゆゑ為なる作法ゆゑ作りしゆゑ
糸肉して明白のことを盟約とすべしといふ法ゆゑ鉅ひを童
まて糸肉して結ぶ小指ひ押付遊ぶべしとて王森不窮ま
まで今宵の内小引押ひ国へ引給り時を待く旗をとんの
法ゆゑ思ふ思いいろく山時王森中るい軍の奥深い作るを
以て係を作い為ゆゑ作るとよりとて作ゆゑ実義なく糸肉五
ていろく撫ひ事の明白と来しゆゑ作るゆゑ作て上下心
を安んじべし元より作り拵なゆゑ神い祝礼と交めるべく

鉅ひ解け人心ゆゑ毋なる時ゆゑ作て遠く事を作りめへせし
後編一変しそれゆゑ聖教糸肉の用意をあを明きゆゑ乾隆四十二
年三月十八日供の用意を整ひ糸肉を元より嚴密を初め
諸友善く来候して嚴密なゆゑ王湯ゆゑ鉅小到て勅
使の報を速く今日王湯糸肉して撫ひをあゆゑ二心な
ての奥白糸肉せざるゆゑ作て再び問ゆゑ及ゆゑ押来て討死
猶ひの拵を改べしとゆゑ法度の中より滿澄ゆゑ出て王
湯が陽作為ゆゑ作きあるべしゆゑ奸曲侵智の者い彼令
狗中に大逆を抱くゆゑ逆なゆゑ糸肉して面ゆゑ作義を
飾り恐まとゆゑ作言をいく鉅ひの旨を誠ゆゑ中小言況

んと易うるべし　董明ゆいやくるに高尤なることも志偽
を擇るに時のよりの若きに臣と云へべたとへ王湯の行程よ
陳ぞるとも孫臏孫の企あるべ時濁りて清うる良じかし
さてもさちあらべを府捕へて獄よりとえ又羅金昌をん
でやうるに注者古明の志もく鄭芝龍りを飛なきふ潔
詐よ俊く是飛をも孔さ陸陽より石砌して獄よりしあ人
とくく芝龍しふ代うしむを虚よ祭じて我国秘帝陸東
と敬く利を得ひ明い蒙害者一の地一所を奚ふのことなる
芝龍りを獄よ下ちものの不南の改令をんく明の改を孫汚
名を万世よ残を古後よも飛の銀りをん是程く功の銀数い

是重く法と是に依て之を者まべ今王湯を捕ふ捕
んと為べうべ子又勿よをべうべ若偽く陳ぞるるもせよ
一度い許し飛捕て紙代をる表を表るの良じまづ王湯
ぐ素肉の指ひを疑べしと心獄度よ一度を殺なく王湯
軽よ出て濃く犯すまい厳寛昨日の銀を知れをなんで
二心ちさの旨を奏し誓約をあをべし　此時王湯偽り哭
て罪代を二の内民時うまべを彩る陸奏を済帝銀を彩り
震禁と怪しまるの恐まるあしと笑へて面よ滅をあるを
ちまを俊く法度ひを安んじ帝も衛く銀ひを晴させあひて
盟ひの儀式を命じゆ厳審硯を出して王湯再報う

誓書をもつてしむ其文曰

奉誓 臣挾野心而企隱謀欲奉弑
帝者讒者之謀言不可有其謂臣是累代恩之忠臣番
所知世也雖然何計蒙此不審嗚呼天哉命哉臣誠心盟
而不可有二心於偽者天地鬼神罰臣者也

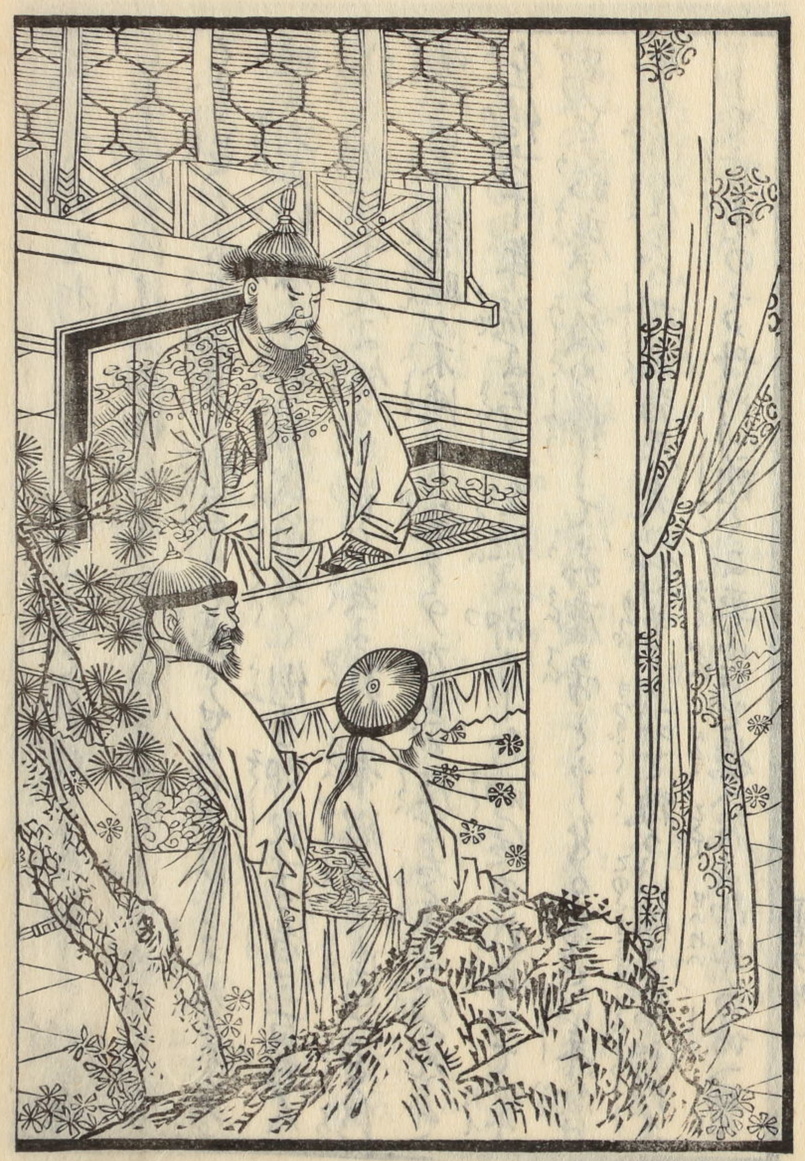
王錫血判

乾隆四十二年

扨のごとく沸めく発出て嚴審んとく言ふ濱む帝を結
め法度一図鎮ひをそなへて王陽を陥しまり王陽を家
ふ陥りくあくの也陥ふもも法ふ〜暗く闇の死を結つ

○新帝即位の事

朝廷まへ著く苦政を行ひ王威の衰る兆しゆや
法ふより変を生ずるの出来り甘肅省小ち丹礼を記るの
ち沒をを撰ぐ横城討内小怪しきのあり乾隆四十二年
六月十七日晴天にして風ふく強ふなる城内外の家屋一
廏の内ふ数百野飛き例まりと苦ぐ有る解ぎ滅し
て扨ち年と虫ども多ふ王陽が小変あり又高丹が告
あり今又横城の変を告ぐ治世ふ乱を起るべくしの誠を
あまび要害を固し長策を用ふする如じとも乾隆四十
七年七月二十一日多くの工を石集め矢を打しむる煙の口
ぐり地震して巧を放ふあさび同十月十七日まで多人数



清ノ八

をして矢を打たしむるあり遠きに炮に震動して巧を施
すの能くに絶み止む是奇矣のみなりと上下始めて驚
くと雖ども帝書て獻ずるを撤させざりしが又泰寧乃
地に大水地震し霍苗氏家畜に例を即死する者三百餘人
傷く者二千人に及ると告ぐ爰に於て帝邪臣を信じて正
道の奇変朕が不德より起るのみなるべ徒を左ふに徒くんとて
左徒六十年流に左ふみを徒に即うむ即徒の礼辛つて辛
号を嘉慶と改め称して嘉慶帝と中興する事ざれ年初け
なく徒さべ相国張原夫帝に政を執る此時又呂布列来
して甘粛の方丹に所くに要害を擁へ既に西寧の城へ坤

よせ事を起すと若しくべ相国張原夫大に驚き文武
の百官衆を集めて軍議評定あるも謂る如く
百年の久しく武を偃し兵を練るのみなく若しこれ訪文り
武を奇に思さん酒色を捨て音樂を事とするの時うまべ
復あるべく馳向い戦んと云者うく只恐き果を守て一白一言
出さるの色無く王陽もて席に侍うり恐しに見偏
竟の術なりと内心に恢びをくに出くゆるい臣先帝の時に
仕ふ霊を蒙り給まども弱冠の柔明白に中興さ
れ不審晴らくと雖ども後行の才功を立るのみ此この度
甘粛の賊に仕付りまきべ民ど一族を引率して逆らに張国

一戰のたゝかひ高丹がこうべを引拉んと勢へせぐおもむきに相國
法原支と始め一統憑りくこそらへ王陽ゑと感じ
るあまりよつて帝に奏し相國をして其旨を許さん則
添州征討將軍に任じ名望數匹を賜りける時羅金昌ら
ぞを出さく中拓王の將軍一族の一人といふく達院の殺戮と率
ぐんぬ受來なきこれ將ども孫くい素し加勢して御り
王の將軍を投んとする王陽ゑ岳と寄て冷義いて云う羅ら
將軍の心添ある陰素し と臣ども我家い平ゑ小武を孫り去
平和礼を忘ぞ高丹如さの小敵に人の加勢無用也と
かし法く蓋へる是則ち王陽ゑ己まぐ陰孫あんて高丹

えん征討に流け亜雄に國へ引義り拓を固くして後王都を奪
さん計略あまべし流して王陽ゑ彩に成り一族張陽に源
物の討に高り高に打ん平を用を為べし出陣の
支度整へれば一万三千の軍を率ひて
發端とい後ぞ合さこそ是清の禍を用く
己まう本國さして進ぜらう

清明軍談卷之一終

合

十八編